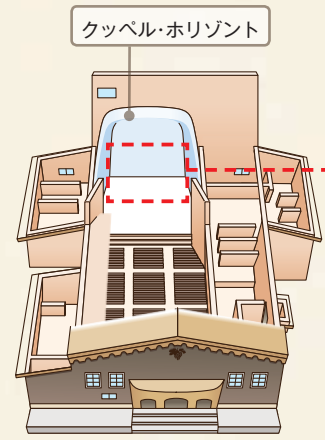


図解 かつ き てき ぶ たい そう ち  
**画期的な舞台装置の**  
 つき じ しょう げき じょう  
**築地小劇場**

1924 (大正13)年、築地小劇場という劇団のための劇場が、誕生した。それまでの劇団は専属の劇場をもつことがなかったため、実験的な開場だった。ヨーロッパの小劇場をまねて先進的な舞台設備を整えたり、思いもよらない舞台装置をつくったりして、人々の注目を集めた。



●劇場の内部  
 ドーム型に丸くなった壁(クッペル・ホリゾン)やスポットライト(照明器具)などの先進的な舞台設備を整えていた。座席数は468席。

●正面から見た劇場

建物は1階建ての西洋建築。



築地小劇場を築いた2人

演出研究のためにドイツに留学中だった土方は関東大震災の知らせを受けて急ぎよ日本に帰国。残っていた留学費用を元手にして、新しい演劇の実験劇場を起そうと決意し、演出家・劇作家の小山内を誘って、築地の地に築地小劇場を建設した。2人は演劇について語り合い、精力的に活動した。



小山内薫 (1881~1928)



土方与志 (1898~1959)

画期的なつくりの舞台装置

築地小劇場で公演された『朝から夜中まで』の舞台装置は今までになつくりのものだった。舞台は3層からなり、それぞれのコーナーで物語が展開される。舞台装置1つのなかにいろいろな場面をもたせたつくりは新しく、人々の評判を集めた。

手紙がつなげた演劇の輪

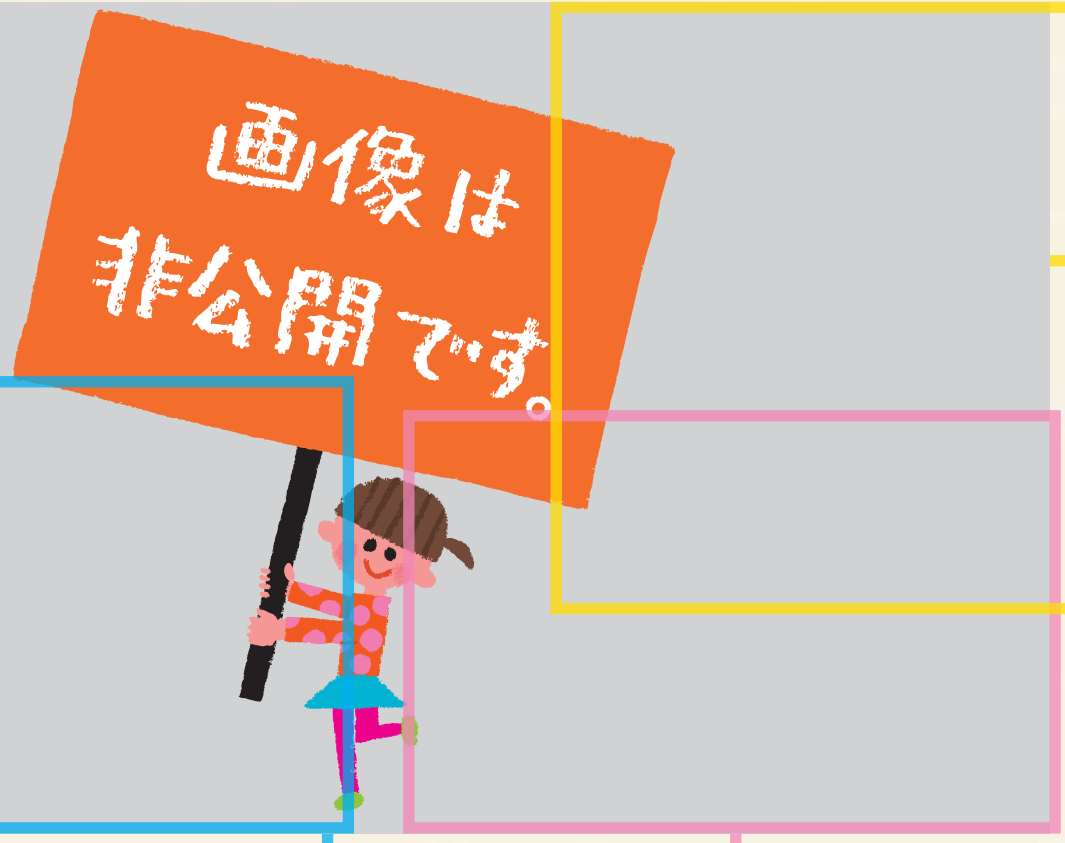
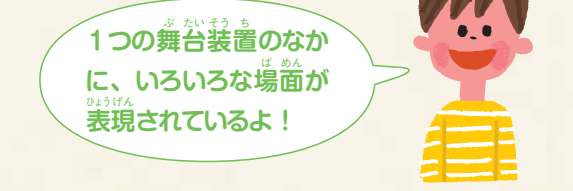
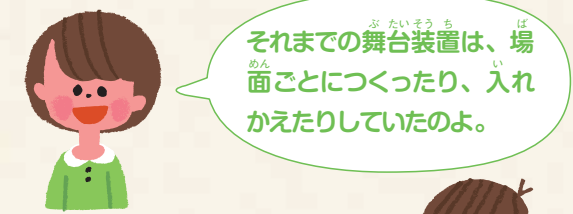
築地小劇場の第1回公演の『海戦』という演目を見て感動した舞台美術家の村山知義は、意を決して土方に「舞台装置を手伝わせて欲しい」と手紙を送った。これを受け入れた土方は村山に『朝から夜中まで』の舞台装置を任せた。

村山知義 (1901~1977)

ヨーロッパ留学の経験をもち、舞台美術家のほか、演出家、劇作家としても活躍した。



画像は非公開です。



画像は非公開です。



画像は非公開です。



画像は非公開です。

●舞台の左下  
 写真は、『朝から夜中まで』の第6場、踊り場の特別室での場面。



画像は非公開です。

●舞台の右上  
 写真は、『朝から夜中まで』の第4場、出納係の家での場面。

●朝から夜中まで

銀行の出納係である男が、客として現れた美しい女性に心をうばわれ、銀行の金を横領し人生をおかしくする物語。

●舞台の右下

写真は、『朝から夜中まで』の第1場、銀行の出納口での場面。

●映画も人気だった

明治末から大正にかけて、外国から映画が入ってきた。映画のことを当時は活動写真とよび、動く写真にみんな夢中になった。



●映画館や劇場が増えた

関東大震災をきっかけに、今まで劇場だったところも映画館として再建されることが多かった。中央区にも映画館が増えた。